

當御代、如令條皇祖以下御三代、可有減畫事、

右一紙被渡候、向々自議奏去文政元年五月被觸候、通被告示之、但彼時院中藏人上北面以下自院

傳觸示よし、今度後院之輩へは、從當役可觸之旨也、非職人、上北面、主典代、廳官、所衆、下北面、取次、北殿、北面、又輪門本願寺、其外

無住内々門跡有無住共、外様門跡比丘尼等は、從御世話々々可達、同役より被示之、右觸方、文政元

年之例見合、後刻所司代へ申達、別紙之通被仰出、一同へ相觸旨爲心得申達由、僧尼も又外ニ九所

添之、

御諱相避、且臨文減畫之義、去文政二年十一月、先役より御先役へ申進候次第も有之候、其節に

は、

惠 兼 智 英 遵

右五字相避候義申進候得共、當御代にては、

御皇祖以下之御諱

兼 惠 紘

右三字被避之候、其許御心得ニ猶又申進置候事、

八月

別段以演說令申、紘ノ字皇統、御系統之類ハ、不缺末畫爲此分之由、清宣申述之、

各承知自跡可返答之、

皇統之字、不缺末畫歟是有禁忌之故、今案且有存其說人、有之歟、仍殿下申伺之處、皇統之時ハ、偏

ノ糸、如此可減被命、

一今日、稻葉出羽守位記宣旨口宣案相調所司代へ達之、越智ノ智字、不減、旁、前文爲心得令申候、

〔取次日記〕嘉永元年八月六日、左之通議奏衆御達、書面御附衆被爲見、